

# 大学授業の質改善以外の学習支援にどう取り組むか

## How to Support Learning other than Improving Quality of College Lectures

—学習センター関連資格制度についての米国調査報告—  
- A Report from USA on Qualifications around Learning Centers -

鈴木 克明\*      美馬 のゆり\*\*      山内 祐平\*\*\*  
Katsuaki Suzuki\*      Noyuri Mima\*\*      Yuhei Yamauchi\*\*\*

熊本大学\*      公立はこだて未来大学\*\*      東京大学\*\*\*  
Kumamoto University\*      Future University Hakodate\*\*      Tokyo University \*\*

〈あらまし〉 大学授業改善以外の学習支援を行うための認定制度について米国訪問調査の結果を報告する。大学のユニバーサル化が進む米国では、上級生を活用したチュータリングや学習支援センターによる支援などについての制度化が進んでいる。本報告では、関連学会が行っているチューター研修認定、学習センター認定、及び学習センターリーダーシップ認定制度について報告する。我が国における学生支援の在り方について考えたい。

〈キーワード〉 高等教育 学習センター 調査報告 チューター 認定制度

### 1. はじめに

近年我が国の高等教育の大衆化から派生した課題への解決に向け、初年次教育、リテラシー教育、キャリア教育、ファカルティ・ディベロップメント(FD)などの必要性が議論され、文科省からの競争的資金などを得て各大学で取り組みが行われている。本発表者3名で構成する科研費の高等教育調査チームは、今から40年ほど前に大学の大学の大衆化を迎えた米国の大学での動向に注目した。Webなどを利用しながら調査を実施したところ、学習センターという組織の存在が浮かび上がってきた。学習センターについて最大規模の学会である米国 NCLCA (National College Learning Center Association) の年次大会に参加し、また同学会で優秀センター表彰を

2008年度に受けたテキサス A&M 大学学生学習センターを訪問し、情報収集を行った。本稿では、その成果の一部として、学会が行っている認定制度を中心に調査結果を報告する。

### 2. 米国における学習支援関連学会

NCLCA は、関連諸学会とともに、学会連合 Council of Learning Assistance and Developmental Education Associations (CLADEA)を形成し、互いに連携しながら活動を展開している。表1に学会連合に参加している学会の一覧を示す。NCLCA 全国大会では、他の加盟団体の展示ブースも設置され、口頭発表においても各団体の活動紹介なども含まれており、協調関係がうかがえた。

表1 CLADEA 加盟団体一覧

---

ATP: Association for the Tutoring Profession	( <a href="http://www.myatp.org/">http://www.myatp.org/</a> )
CRLA: College Reading & Learning Association	( <a href="http://www.crla.net">http://www.crla.net</a> )
NADE: National Association for Developmental Education	( <a href="http://www.nade.net">http://www.nade.net</a> )
NCLCA: National College Learning Center Association	( <a href="http://www.nclca.org">http://www.nclca.org</a> )
NCDE: National Center for Developmental Education	( <a href="http://www.ncde.appstate.edu">http://www.ncde.appstate.edu</a> )

---

出典 : <http://www.crla.net/cladea/>

### 3. チューター研修認定制度 (CRLA)

CRLA (College Reading & Learning Association) はその前身から数えると 40 年以上の歴史をもつ学会である。チューターの質を高める制度として各大学が行っている研修が一定の要件を満たしていることを証明する認定制度(ITPC: <http://www.crla.net/itpc/>) を設けており、米国を中心に 5 か国約 850 機関が認定を受けている。我が国では唯一、2002 年から名桜大学語学学習センターが認定機関として登録されている。

学生支援のための施設づくりも大事ではあるが、そこで行われる活動の質を左右するのは、チューターの学習支援力である。せっかく来訪したのに満足な支援が受けられなかったら学生のセンター利用は定着しない。逆に、チューターが答えを教えたり代りに宿題をやってしまうような行き過ぎがあったら自分で学習できる学生は育たない。また、学習内容に精通しているだけでは効果的なチュータリングはできない。良いチューターを確保するためには、チューターになるための専門的な研修が不可欠である。CRLA の認定を受けるためには、ガイドラインに従った事前研修だけでなく、チュータリングの見学、メンターによるモニタリングと評価・改善指導など、様々な角度からチューターがチューターとしての職務を果たせる準備をし、また実際に果たしていることを確認する仕組みが求められている。

事前研修の内容は多岐にわたる。たとえば、認定機関の一つテキサス A&M 大学の学生学習センターでは、差別とハラスメント、倫理、詐欺・損傷・迷惑行為の報告についての e ラーニングモジュールを学習することから始まり、新任チューターには、倫理、チュータリングの定義と責任範囲、チュータリング基本ガイドライン、チュータリングでやるべきことと禁止事項(表 2)、問題解決のモデリング、積極的傾聴と言い換えについて、丸一日かけて討議中心で学んでいく。さらに継続者も交えて、スタディスキル、成人学習者・学習理論・学習スタイル、レファレンススキル、目標設定と計画についても一日かけて学ぶ研

修が毎学期行われている。

CRLA の認定制度へは、所定の手続きに従って申請し、審査を経て認定される。新しい申請は 1 年間有効で、その後に省察と更新のための第二ステップ (3 年間有効) に移り、第三ステップ以降の再申請は 5 年間有効の更新制となっている。申請料は、申請するレベル数に応じて 150 ドル~350 ドルと安価であり、過去の申請書がサンプルとして Web サイトに提供されている ([http://www.crla.net/itpc/application\\_samples.htm](http://www.crla.net/itpc/application_samples.htm)) など、きめ細かい配慮がなされている。

表 3 に、認定レベルとその要件を示す。通常の研修にあたるレベル 1 では、事前研修 10 時間以上が要求され、所定の研修内容をカバーすることが求められている。その一方で、扱う個々の内容にどの程度時間を割くのか、また大学独自の項目 (その他) を含めて 16 項目のうち 8 以上という幅を持たせてあり、大学の置かれている状況に応じた研修が組み立てられるようになっていることが読み取れる。レベルが上がるにつれて、より多くの研修時間と高度な研修内容が要求されている。大学によっては、レベル 1 のみの認定を受けているところもあれば、全レベルの認定を受けている機関もあり、レベル設定にも柔軟性が確保されている。

表 2 チュータリングでやるべきことと禁止事項 (テキサス A&M 大学)

#### ■チュータリングでやるべきこと(Do's)

時間厳守・正直・情熱・真剣さ・傾聴・いとわないこと・学問基準遵守・健康・可動性・良い質問・独立性の尊重・我慢強さ・秘密保持・名札をつける・学習方法への焦点化・学習代替案の推奨・沈黙の許容

#### ■チュータリングでの禁止事項(Don'ts)

教員の代行・知識の供給者・外見での能力判断・低空飛行の許容・デート・一人に占有させること・上級科目で習う解決法の導入・窓から外を眺めていること・宿題を学生の代わりにやること

出典：チューター研修配布資料 (p9-10)

表3 CRLA チューター研修認定レベルとその要件

認定レベル	(1)通常 Regular	(2)上級 Advanced	(3)卓越 Master
研修時間 <sup>[1]</sup>	10 時間以上	+10 時間 (合計20時間以上)	+10 時間 (合計30時間以上)
そのうちの 直接研修 <sup>[2]</sup>	6時間以上	4 時間以上	2時間以上
研修内容	以下の項目のうち 8 以上を含む	レベル 1 の復習の 他, 以下のうち4項目 以上を扱うこと	レベル 1 及び2の復 習の他, 以下のうち4 項目以上を扱うこと
研修項目	チュータリングの定義とチューターの 責任, チュータリングガイドラインの 基礎(やるべきことと禁止事項), チュ ーターセッションのうまい始め方と終 わり方の技法, 成人学習者・学習理 論・学習スタイル, アサーティブネス・ 困難な学習者の扱い方, ロールモデ リング, ゴール設定・計画, コミュニケ ーションスキル, 積極的傾聴と言 い換え, 参照スキル, スタディスキル, クリティカルシンキングスキル, チュ ーター制度の倫理と哲学遵守・セク ハラ・剽窃, 問題解決モデリング, そ の他	掘り下げ質問 (Probing questions), 右脳・左脳学習, 文 化的意識と異文化間 コミュニケーション・多 様性, 学習資源の同 定と活用, 特定スキ ル・領域におけるチ ュータリング, 勉強行 動の測定と変更, そ の他	自己主導学習・脳学 習・記憶, 特定対象 集団の扱い方, 高等 教育における学習セ ンターの役割, 学習 経験の構造化, チュ ーター研修と監督 (監督スキル), 集団 管理スキル(グルー プインタラクションとダ イナミクス), その他
チューター 経験	25 時間以上	+25時間 (合計50時間以上)	+25時間 (合計75時間以上)
選抜方法	科目担当教員による面接と書面での許可, あるいは, 面接とチュータートレーナーに よる推薦+チューター担当科目の成績 A または B 相当		
評価基準	定期的実施され, その結果がチューターに知らされていること		

注:<sup>[1]</sup> 研修時間 10 時間は, チューター研修 1 科目で置き換えが可能

<sup>[2]</sup> 直接研修は, トレーナーが監視する, 双方向で, ライブで, 同期型の研修を指し, ワークショッ  
プ・セミナー・対面またはオンラインのディスカッション, セカンドライフ等の仮想環境で実現で  
きる. 直接研修以外のものとしては, ビデオ・DVD・Web サイトによる自習, トレーナーや上司と  
の面談, Web クエスト・ポッドキャスト・Web キャスト・Wiki・ブログ, テキスト・配布物・探索ゲーム,  
プロジェクト等が挙げられている.

#### 4. 学習支援センター認証制度 (NADE)

CRLA の認定制度がチューター研修に特  
化しているのに対して, NADE (National  
Association for Developmental Education)  
では, 学習支援センターの活動全体の品質に  
対する認証制度を提供している. NADE は,  
1984 年に設立された団体 (前身組織は 1976  
年までさかのぼる) で, 会員数は約 3000 人,  
31 の支部と年間 14 の賞, 4 つの奨学金, そ  
して 17 の SIG を持つ組織で, 日本リメディ  
アル教育学会 (Japan Association for  
Developmental Education) との連携がある.

1995 年に「自己評価ガイドブック」第一版  
を用いた学習支援センター認定制度を開始し,

2010 年 2 月現在, 49 の機関が認定を受けてい  
る. 最低 3 年間の自己評価活動の記録と基礎  
データの提出を求める厳格な認定制度であり,  
7 年更新制で申請費は 1,000 ドルである.

2009 年に「自己評価ガイドブック」第二版  
を発表し, 現在の認定制度が整備された. 第  
二版改訂の要点は, (1) 提供サービスの量と  
質を認定する一般レベルと学生の学習成果を  
認定する上級レベルにレベル分けしたこと,  
(2) 評価項目を必須項目と選択項目に分類  
したこと, (3) 認証規模をチュータリング,  
科目関連学習支援 (Course-Based Learning  
Assistance), 開発科目提供の 3 つに分類した  
ことである. 表 4 と表 5 に, 科目関連学習支

援の認定のために必要とされるデータの一覧（一般及び上級レベル）を示す。

NADE 学習支援センター認定制度では、1) ミッションとゴール, 2) アセスメントと評価, 3) プログラム設計と活動, 4) プログラムの管理運営, 5) 人的資源, 6) 価値システムの各側面についての複数項目を5段階で自己評価し、なぜその段階と評価するかのエビデンスを集めることが要求されている。さらに、不十分な項目について、どう改

善するかアクションプランを作り、その効果をベースラインデータと活動後のデータを比較して示さなければならない。データに基づく改善活動の認定であり、センター自らが自己点検・改善を常態化していることを求めているのが特徴だと言える。上級レベルの学習成果に基づく認定（表5）では、支援を受ける学生の学習成果のみならず、支援を提供するチューターがどう育ったかも視野に入れていることが注目に値する。

表4 NADE 学習支援センター認証に必要な評価指標項目（科目関連学習支援：一般レベル）

**<必須データ項目>**

1. 年度・学期ごとのセッション数
2. 年度・学期ごとの参加者数（重複カウントなし）
3. 年度・学期ごとの参加者満足度

**<選択データ項目：下記より1以上報告>**

4. 参加者数（上記2）が対象学生数に占める割合
5. 分類ごとのデータ（実験・ワークショップ・セッションなどのサービスタイプ別、対象学生の学年別、GPA 別、その他の重要な学生属性別、実施時期別、コース要求度別、入試時の学業スキル別）
6. 参加者ごとの平均参加時間数
7. レベルごとのファシリテータの総数と平均人数
8. ファシリテータの研修満足度・勤務満足度
9. サービス向上を示すその他の指標（事前相談必要）

出典:Thompson & Graham (2010)の発表資料による

表5 NADE 学習支援センター認証に必要な評価指標項目（科目関連学習支援：上級レベル）

**<必須データ項目：一般レベルに必要なすべてのデータに加えて>**

1. 喫緊度・重要度が高い科目群について、参加学生の評点を最低回数（通常3回以上）のセッションを経てから次の指標1つ以上で分析すること：不参加学生の評点との比較、参加学生がサービスを利用しなかったら得ただろうと申告した評点との比較、参加学生の当該科目非放棄率、参加学生の獲得評点割合、参加セッション回数別評点分布。

**<選択データ項目：下記より1以上報告>**

2. 参加回数分析（影響を及ぼすためには最低何回参加が必要で、何回以上はそれ以上の向上が見込まれないかを示す）
3. 参加者の当該学期、次学期、次年度、2年次以降の継続率
4. 参加者のGPAまたは要観察状態の参加前後の変化
5. 参加者の学習方略の利用に関する変化（自己報告またはテスト）
6. 科目内の課題ごとの評点変化（参加・不参加者比較）
7. 参加者またはファシリテータの量的・質的成長（認知スキル；批判的思考力、リテラシー、知的成長、メタ認知、学習方略など。情意スキル；市民性、リーダーシップ、親密性、協調スキルなど）
8. ファシリテータの学術的リーダーシップスキルの開発（事前・事後テスト評価、セッションノート、または指導者の観察レポートによる）
9. ファシリテータの辛抱強さ・継続率
10. ファシリテータのGPAの参加前後の変化
11. ファシリテータの卒業データ（就職率、進学率、転学後の成績など）
12. 学生の成功を示すその他の指標（事前相談必要）

出典:Thompson & Graham (2010)の発表資料による

## 5. NCLCA 学習センターリーダーシップ認定

今回年次大会に訪問した学会 NCLCA は、1985 年に中西部大学学習センター協会 (Midwest College Learning Center Association) としてスタートし、現在の名称に変更したのが 1999 年であった。毎年全国大会を開催している他、学会誌「The Learning Assistance Review」も有する学術団体であり、高等教育における学習支援専門家を支援することをミッションとしている。

25 周年を迎える NCLCA が学習支援センター業務でリーダーシップをとれる個人を認定する固有の制度を定め、これまでに 73 人 (昨年は 23 人) を認定してきた。レベル 1 (入門者) から 4 (経験 11 年以上更新不要の生涯認定者) まであり、個人の関連業務経験や貢献度を自己申告書と推薦書などで審査して授与する制度である。申請料はレベルによって

異なり 50 ドル～250 ドルで、5 年更新 (レベル 4 を除く) となっている。表 6 に、各レベルのリーダーシップ認定申請の要件を掲げる。レベルが上がるにつれて、自己研鑽から学会貢献に力点が移行しているのが分かる。

## 6. おわりに

本調査で明らかになったことは、初年次教育、リテラシー教育、キャリア教育、FD など、学内における学習支援活動が組織化され、実施されていることである。これらの活動が組織化されることによって、効率よく、効果的に実施されており、その中心となるのが、学習センターであった。活動内容も空間も、大学図書館との連携は強く、学習センターに関わるスタッフは、大学教員のほか、専門職スタッフが配置され、ここに学生や非常勤のチューターが存在した。

表 6 NCLCA 学習センターリーダーシップ認定における各レベルの要求事項

### ■レベル 1

この分野に入ってきた人を対象 (経験 0～2 年: 上司からの推薦書 2 通)、学部卒で、学習支援の理論と実践についての基礎知識を有すること (1～2 ページの Position Statement と 1～2 ページの職務開発計画、ならびに地方・全国大会への参加や関連科目履修歴)。申請料 50 ドル (5 年間有効、更新可能)

### ■レベル 2

経験 3～5 年で学部卒 (上司からの推薦書 2 通)。学習支援の理論と実践についての豊富な知識を有すること (1～2 ページの Position Statement と 1～2 ページの職務開発計画、ならびに CV)。分野の発展に貢献したこと (大学院科目の受講、2 件以上の学会発表、委員会活動、全国大会への参加、研修受講などの要件 5 つのうち 2 つ以上を満たす証拠を提出)。申請料 75 ドル (5 年間有効、更新可能)

### ■レベル 3

経験 6～10 年で修士号を有すること (上司からの推薦書 2 通)。学習支援の理論と実践についての豊富な知識を有すること (1～2 ページの Position Statement と 2～4 ページの自分自身及びスタッフについての職務開発計画、ならびに CV)。分野の発展に大きく貢献したこと (5 年以上にわたり、4 件以上の学会発表、委員会活動、NCLCA における活動のいずれかがあること。それに加えて、博士号取得に向けての科目履修、学会誌・Web サイト・ニュースレターにおける論文の執筆、委員会活動、学会発表、学習支援センターの活動報告書の執筆の中から 2 つ以上)。申請料 100 ドル (5 年間有効、更新可能)

### ■レベル 4

レベル 3 の要件を満たし、経験 11 年以上で修士号を有し、博士号取得に向けての実績があること。推薦書は 3 通、学会への貢献度が高いこと。申請料 250 ドル (生涯認定)

出典: Maslana, R. (2010). Learning Center Leadership Certification, NCLCA National Conference 2010, September 30, Charlotte, NC

授業以外の学習支援の歴史が長い米国においては、それぞれのテーマごとに別センタ

ーが組織され、学内に点在してきた流れがある。それらを図書館中心に集結して「ラーニ

ングコモンズ」(河西 2010)として集約化していくという動きも徐々に進んでいることが分かった。NCLCA 全国大会においても、ラーニングコモンズという用語が広がりつつある段階であり、発表の中に集約化を報告している事例もいくつか見られた (e.g., Fadden & Zlotkowski, 2010; Search, 2010)。

一方、学会活動もそれぞれの組織がそれぞれの歴史的経緯を有し、学習支援活動の中の異なる領域に力点を置いて活動してきた。それが学会連合 CLADEA としてゆるくまとまり、「互いの足を踏まないように配慮しながら」(関係者からのヒアリングで得た言葉)互いの得意分野を尊重して連携している様子がかがえた。

例えば、本稿で紹介した CRLA はチューター研修制度を認定している一方で、NADE は学習センターの活動自体を認定しており、認定の対象をうまく切り分けている。さらに、NADE の学習センター認定にチュータリングを対象として申請する際には、CRLA のチューター研修制度での認定を経ることを義務づけている。NCLCA は、同じ学習支援センターを対象としながらも、組織ではなく、組織を支える個人を対象としたリーダーシップの認定を行うことで棲み分けている。また、本稿では紹介しなかったが、CLADEA のもう一つの団体 ATP では、研修を受けたチューター個人を 3 レベルで認定する制度 (<http://www.myatp.org/cert.htm>) を有しており、CRLA の研修プログラムを認定する制度と巧妙に切り分けている。

認定制度は、大学における学生支援にかかる様々な活動自体を存続・発展させていくための自助努力である。各大学での学生支援活動をより安定的にするためには、成果をアピールし続ける必要があり、学会における認定を受けることが「全国レベル」での活動として認知されていることの証となる意義は小さくない。「評価主体としてデータに基づく決定ができる機関になり当局の信頼を勝ち得ることが大事です。そのためには、自組織の評価を他者にやらせて放置しないことです。評価活動で関係者を巻き込んで、自組織の活動を広報し、意見を聞き、味方を増やすことです。

何を評価指標にすべきかを確認して、改善サイクルを回すことが重要です。」NCLCA 全国大会で聞いた NADE 担当者のこのメッセージ (Tompson & Graham, 2010) が印象深い。目標を定めてデータに基づく改善サイクルを自分たちで回していくという、体系的アプローチの意義が、ここでも強調されていた。

ユニバーサル化時代を迎えた我が国の大学においても、授業改善を目指す FD との両輪として、単なる箱モノの整備を超えた授業以外の学習支援環境の構築に組織的に取り組む意義は大きい。とりわけ、新たな施設で行われる学習支援の質をどう維持し、活動をどのように活性化していくかという観点から、米国の学会が制度を整え大学をリードしている姿が頼もしいと強く感じた。学習環境の整備という観点から大学生の学びを支援する方策として、大学の 대중化を迎える我が国の大学や関連学会にも大いに参考になると思った。

## 謝辞

本研究は、平成21-22年度文科省科研費(基盤B: 課題番号21300314: 研究代表者吉崎静夫)の補助を受けた。

## 参考文献

- Fadden, K., & Zlotkowski, L. (2010). Early Alert Systems: Infusing a Proactive Approach to Student Academic Success into the Campus Culture. NCLCA Conference, October 1, 2010, Charlotte, NC
- Search, S. (2010). Integrated Learning Support: Greater Than the Sum of Its Parts. NCLCA Conference, October 1, 2010, Charlotte, NC
- Thompson, L., & Graham, K. (2010). Evaluating your tutoring or course-based learning assistance program using the *NADE Guides to Self-Evaluation* (2nd Ed.). September 29, 2010, Charlotte, NC
- 河西由美子(2010)「自律と協同の学びを支える図書館(Part 4)」山内祐平(編)「学びの空間が大学を変える」ボイックス, 101-127